

京都府公立中学校会会長賞

「備えあれば憂いなし」

京都府立南陽高等学校附属中学校 1年

鱒坂 一輝

もし、あなたが今、自然災害によって危険な状態に陥った時、どうするだろうか。東日本大震災や熊本地震、度重なる水害など、僕の記憶に残っているだけでも重大な自然災害は国内あちらこちらで起こっている。「備えあれば憂いなし」と言われるように、自宅での安全対策や非常食などを備蓄している人は少しずつ増えているかもしれない。しかし、自宅周辺以外で災害にあった場合など、様々なケースを想定して備えておくことが、本当の防災、そして減災ではないだろうか。

「災害弱者」という言葉がある。災害弱者とは、身体に何らかの病気を患っている人や、高齢者、子ども、外国人、旅行者など、災害の際、避難や復興が困難な状況が生じる人たちの総称である。このような災害弱者でも、安全に避難し、避難所で安心して過ごせる対策が必要となる。

そこで災害が起こった場合、皆の命を守るには何が必要か、どのような心掛けが大切なのか考えてみた。

まず、高齢者や病気を患っている人、子どもに対しては、「地域との関わり」が重要だと考える。災害が起こった時、地域の関わりがあれば、

「向かいのおばあちゃん、足が不自由で、一人では避難できないかもよ。」

「〇〇さん共働きだから、夕方は子どもだけかもよ。」

などと近所住民で安否などを確認し合えるであろう。

次に外国人や旅行者に対しては、「国や自治体の対策」が重要だと考える。旅行者においては土地勘もなく、特に外国人は言葉も通じず、日本語も読めない場合が多いので、コミュニケーションがとりづらい。これらの不自由な事柄の対策として、多力国語表示の看板やひと目で見てどのような施設かが分かるピクトグラムを統一するなどだ。来年の東京五輪に向けてこれらは進みつつあるが、防災という別の角度から見て、全国的に広げ、統一すべきことだと思う。

さて、無事避難所に到着したとしよう。一番に皆が欲するのは食料だろう。支給される災害備蓄食や炊き出しに並び人々。しかし、安易にその列に並び食べ物を口にできない人もいる。それは噛む能力が低下している高齢者や病気により食事制限のある人、そして食物アレルギーの人だ。実は僕自身、重篤な食物アレルギーで、過去の災害での避難所の状況をテレビで観て、もし自分が…と想像すると怖くなった。我が家では食物アレルギーの僕でも被災した時困らないように、アレルギー対応食を備蓄しており、それに加え、宇治と城陽のアレルギーの人がいる家庭と協力して専用の道具や食品を保管している。被災の状況に応じて互いに助け合えるように、数軒の家に分けて保管しているそうだ。また、アレルギーの情報が保護者、かかりつけ医の連絡先などを記した「アレルギー緊急カード」を抗アレルギー剤と一緒に通学リュックに入れている。僕の持っているアレルギー緊急カードに似たカードを作成していた愛媛県大洲市では西日本豪雨でほとんどの家が水没したにもかかわらず、ケガ人を出さなかったという成果もある。このように、持病や常備薬、頼れる人の名前などの情報を準備しておくことで、減災につなげることができるのだ。

災害に対しては、まずは自分を守る「自助」、地域で助け合う「共助」、そして最後に公的機関による「公助」三つ全てが大切である。

自助については普段から避難場所などを家族で話し合っておくことも大切であろう。共助については、個人情報保護法の壁があり、難しいが、「向こう三軒両隣」と昔から言うように、地域コミュニティーを大切にすることが「地域ぐるみの自主防災」に必要なだ。

災害弱者に対して今の僕にできること、僕だからこそできること…。四月から始めた英語を外国人被災者に対応できるようにすること。また炊き出しの際に、使っている食材の情報を誤食対策として鍋の近くに開示するなど、アレルギーの僕だからこそ気付き、行動にうつせるようにしたい。適切な対策をしていなければ、誰もが災害弱者になりうることを考え、日頃から防災意識を高めておかなければならない。地域のつながりが希薄になっている今だからこそ、日頃から声を掛け合い、顔の見える関係を築くことで、災害に強い地域となるのではないか。そして僕でも被災地で困っている人の手助けができるように、防災知識や応急措置方法を身につけて、地域で支え合う自主防災に取り組んでいきたい。ひとりひとりが自分のできることを考えられる地域こそ、災害に強い地域になれると僕は信じている。